

魔術礼装舞台裏◇和系戦闘少女

香枝ゆき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔術礼装に着物が追加されたとあるカルデア。

藤丸立香は振り袖に袖を通してみるものの、動きにくさにびっくり。

和系戦闘少女サーヴァント、両儀式と浅上藤乃が現れて、話題は着物で戦うなんちゃってうんちくへ!?

目次

魔術礼装舞台裏◇和系戦闘少女

魔術礼装舞台裏◇和系戦闘少女

「うん、立香ちゃん、すっごく似合ってるよ!」

着替え終わってまず目に飛び込んだのは、満面の笑みのレオナルド・ダ・ヴィンチだ。

「ふん! まあ極地用礼装よりは暖かそうに見える」

傍らには、婉曲的に誉めている新所長。

「わあ……これが晴れ着というものなのですね!」

目を輝かせているマシユ。

「シオンとの合作の新しい礼装はどうだろう?」

着替えを終えて待ち構えていたのは、礼装の企画、設計、開発者達だった。

わくわくと目を輝かせているスタッフたちに、いったいなんて言え
ばいい。

「……いいんじゃないでしょうか……」

水色の、晴れ着。

日本の民族衣装、未婚女性の礼装。

今度の魔術礼装は、振り袖です。

「いや、わたし成人式まだなんだけど、というか着たことなかったんだ
けど」

他のスタッフから離れたところで、なにもない場所へつい愚痴を吐
く。

単独行動をとっていたアサシンが一人、赤いジャンパーを翻して現
れた。

「ああ、なら練習になっていいんじゃないの? オレみたいに着物しか
着ない生活ならともかく、洋装に慣れてつと着物はきついらしいか
ら」

両儀式。着物にジャンパー、ショートブーツという出で立ちは、見
る人によってはでたらめな和洋折衷なのかもしれない。

それでも彼女はごく自然に身に付けていた。

「着付け手伝ってくれてありがとうね、式。うん、今の段階でもヤバイ

かな……」

振り袖を浴衣と同列に考えたのがよくなかった。

重い。そして動きにくい。

足元もご丁寧に着履と足袋で、ちよこちよこしか歩くことができなかった。

「せめて足元を変えられたらいいんだけど……」

これで戦いに行くことは正直考えられない。

「でしたら、私がおぶっていきましようか？」

穏やかな声とともに、紫の髪が揺れた。

こちらも単独行動が可能で、よく一人の時間を楽しんでいるアーチャーだ。

「藤乃さん……」

「おまえがマスターおぶってどうすんだよ。オレたちはサーヴァント。戦うんだぞ？」

「式さんはアサシンですが、私はアーチャー。遠距離攻撃が可能です」

「そのわりには敵の懐に飛び込むやりかたもしてるじゃねえか」

浅上藤乃の攻撃手段は歪曲の魔眼。

遠距離から対象をねじきる威力を誇る。

それでも稀に式の言うような戦いかたもするのだ。

「マスターさんをおぶっているとき、そんなことするわけないでしょう？」

「どうだかな」

かつてはお互いに殺しあったという、嘘のようなほんとの話を持つ二人。

今では忌憚のない会話を交わしている。

「そもそも式さんの着物、一体どうなっているんですか？袖はジャンパーに入らないと思いますけど」

確かに、いくら式が戦い慣れているといっても、着物で激しい動作ができるとは思えない。

「オートクチュール」

「……………」

限度っていうものがあるとは思う。

「袖は短くしてもらってる」

式がジャンパーを半分脱ぐと、短い袖が現れた。七分袖くらいだろうか。

「オレは仕立ててもらったけど、時間かけりやあ自前で裁縫できないこともない」

「振り袖と一緒にしないでください。大体振り袖の袖を切るなんて振り袖の意味がありませんよ」

珍しく強い言い方の彼女に、立香は一縷の望みを抱いた。

「藤乃さんは……」

きつと、なにか秘訣があるに違いない。

だって、着物を着ていても、敵に肉薄できるのだから。

「……私ですか？」

淑やかな大和撫子然とした風貌が、さらに素敵なものになる。

「感覚です」

「……………」

「……………」

浅上藤乃は痛みを感じない。

無理な動きをしても。

「……まあ、ダ・ヴィンチに言っただけでもらったほうがいいだろう」

気を取り直したように式は言う。

「そうなりや善は急げだ。オレも動きやすいように口添えするから、

マスターも早く」

「式さんだけなら戦闘に特化して守りが薄くなるかもしれませんが、私も行きます」

「よく言うぜ攻撃特化型のアーチャーのくせに」

「攻撃は最大の防御ですよ？」

対等に言い合う二人の姿がまぶしくて、おかしくて。

なんだか、笑ってしまった。

「早く来いよ」

振り返った式に、立香は微笑む。

「ごめん、歩けない」

目の前で、どちらがマスターをおぶるか選手権が繰り広げられた。こういうとき、カルデア戦闘服なら自分でもガントが使えるのになあと、立香は遠い目をするのだった。